市川市国際交流協会主催

外国住民 防災セミナー開かれる

（8日・15日には八千代市総合生涯学習プラザでも）

外国住民を対象にした防災セミナーが12月15日、市川市と同市交際交流協会が主催で開催された。同市の在住外国人登録者数は県内で千葉市に次いで多く96カ国1万1526人（11月30日現在）。中でも中国出身者が5024人と突出していて、韓国・朝鮮、フィリピン、ネパール、インド、タイ、ベトナムと続く。市民の約40人に一人が外国人という状況だ。

防災に関する講演会、講座はこれまでも多く実施されているが、外国人対象のものはまだまだ少ないのが現状。そこで市川市国際交流協会外国人委員会が中心となって、当日は市地域防災課職員による説明資料を日本語だけではなく、中国語、英語の翻訳版を用意し、必要な出席者へは個別に通訳をつけて対応した。会場内には防災備品の展示や避難所案内ブースを設置。また、消防署員によるAEDの説明と通訳を介しての体験を行った。

「災害時は国籍を超えての助け合いが必要になります。外国の方の協力も得て、外国人も日本人も安心、安全に暮らせるまちづくりの実現にむけて活動しています。関心のある方は、どうぞご入会下さい」と委員長の石原みさ子さん。

2月8日・15日（土）には、ちば国際コンベンションビューローと八千代市の共催で、八千代市総合生涯学習プラザを会場に、災害時外国人サポーター養成講座も開催する予定。

炊き出し用の非常食の試食や応急手当の体験、緊急時に必要なもの、ことば等を、実践を通して学ぶ。外国の方で参加希望の方は八千代市国際推進室川田さんまで問い合わせを。☎047～483～1151

現代中高生から見た義民

オリジナル劇

「佐倉宗吾郎」の公演

昔の話講

「いには野アカガエルの里を守る会」

印西市

専大松戸中高生の演技

印西市ふれあいセンターいんばで先月12日、「昔の話講」が開催された。出席者は10代の若者からお年寄りまで150名。

この催しは「いには野アカガエルの里を守る会」が企画した講座「昔の話講」としてはじまったもので、今回は3回目。本来は地元の年輩者を招いて昔話を聞き、歴史や文化にふれ、郷土愛を深める講座で美しいふるさとづくりの前進を目指す取り組み。

今回は旧印旛村村長佐藤栄一氏の昔の話講「かつての印旛沼や人々の暮らし、豊かな自然を語る」に加え、専修大学松戸中学高等学校演劇部生徒らの演劇「さくらSOGO」。

これは処刑を覚悟して将軍徳川家綱に佐倉藩の領民の窮状を直訴した義民「佐倉宗五郎」の物語を現代中学高校生の眼でオリジナル劇に仕上げたもの。生徒らが総合学習で「佐倉宗五郎」を調べる内、宗五郎の生き様から自然を守り、意見を述べることの大切さに気付いていくというストーリー。

「いには野アカガエルの里を守る会」は印西市いには野に都市化、農薬散歩などにより激減している希少種ニホンアカガエルの生息を2002年に発見し、かつて身近にいためだかやほたるなど小動物が賑わう里山の自然保全再生を願い発足した。無農薬の稲作や自然観察調査、外来種駆除、各種講演など幅広く活動。次回は22日（土）午後に勉強会「ホタルの学校」をふれあいセンターいんばで開催する。同会では一緒に活動する仲間を募集中だ。

▽問い合わせ☎090～2331～5104（「いには野アカガエルの里を守る会」植村さん）

タイの伝統工芸　カービング

美しい飾り切りで生活に潤いを

千葉カービング教室　きぼーる　千葉市

野菜や果物、石けんに花や鳥などのモチーフを美しく刻んでいくカービング。タイの伝統的な技術で、専用ナイフ1本で美しい世界を作りだす。

講師の吉田スパポーンさんはタイ出身。20代で日本に留学する前にバンコクの伝統的なカービング学校で学び、タイキュイジーヌコンクール料理カービング総合部門で金賞受賞の腕前。現在カービングスペシャリストとして活躍中だ。

「伝統を守りながら新しいデザインも取り入れたい」と、どんなに忙しくても毎日1つは作品を作るという吉田さんは日々自分自身も技術を向上させようと熱意に燃えている。来日後日本人と結婚、現在小4の息子がいる。自分のカービングの技術を広めようと教室を開いたのは2010年。生徒は一流ホテルの料理人のほか、10代から70代と幅広い。中でも小6から通う吉川美希さん（14）は、大人も舌を巻く程の腕前で「将来はカービングの先生になりたい」と夢を語ってくれた。

「野菜などにカービングして家族に喜んでもらいたい」「作品を友人に贈りたい」など受講の理由は様々。美しい作品にはもてなしの心が感じられる。各々の技量に合わせる丁寧な指導と吉田さんの明るい人柄に生徒からの信頼も厚い。体験教室は材料費込で1000円。その他に検見川教室もある。詳細はHPで。http://chibacarving.jimdo.com/

▼「きぼーる教室」千葉市中央区4―5―1。水金、土曜開催。10時～12時、13時～15時の2回

▽問い合わせ☎043～238～8846

9日　千葉県文化会館小ホール

「かたわらの木々　や
道ばたの草花　を　な
つかしい　と　思うとき、
とおい　むかし、あなた
は　そこにいたのかもし
れない・・・」。

千葉県文化会館小ホールで9日、（特）NPOまちアート・夢虫主催のドラマリーディング劇と打楽器演奏の公演が行われる。上演にあたって台本、構成、演出の半田晶子さんは「昨年4月から11月まで、市民参加者のほとんどが月に1回、森へ行って、キャンプやダンス、造形、歌、演劇、表現ワークショップを行い、その中で森の木々や生き物たちと交感した。その体験を舞台作品にした。作品の土台は、宮沢賢治作『狼森と笊森、盗森』『鹿踊りのはじまり』。賢治作品に描かれた森と人間、動物たちとの交感、その楽しさや喜びなどをモチーフに、長い年月の中で失われた大事なものを再認識し、その大事なものを今と未来へつなげたい」と語る。

出演・スタッフ＝天野眞由美・塩山誠司・芦田崇（劇団俳優座）、山崎哲史（演出家）仲谷智子（ピアノ）、鈴木仁志（作曲）、坂東遥（振付）、高田みどり（打楽器）ほか市民。

▼チケット＝大人2000円、小人（4歳～18歳）1000円。

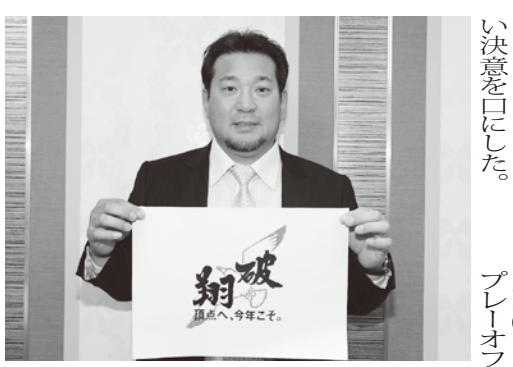
▽問い合わせ☎047～431～2925（（特）NPOまちアート・夢虫）。

翔破　2014年度スローガン　千葉ロッテマリーンズ

「翔破～頂点へ 今年こそ。～」

2014年のチームスローガンは「翔破～頂点へ 今年こそ。～」に決まった。強い決意を現した言葉だ。鳥などが目的地まで飛び切る事を意味した「翔破」は昨年からの引き続き、サブタイトルの文言に「今年こそ。」と加え、スローガンを決めたのは伊東監督だ。

「2013年、達成することができなかった優勝という目標に対して、『今年こそ』の思いを強く込めた。2014年、日本プロ野球界の頂点を目指し、2月よりまた新たなスタートを切る。翔破に向けて長く険しい闘いの日々になると思う。ただ、どんな時も『今年こそ。』という強い気持ちを胸に、試合に挑み、一歩ずつ目標に向かって前に進んで行きたい。みんなで今年こそ優勝するのだという強い気持ちで挑みたい」と強い決意を口にした。



昨シーズンは3位。その中で西武ライオンズから千葉県松戸市出身の涌井秀章投手を獲得。ドラフトでは即戦力捕手として2位で同流山市出身の吉田裕太捕手を立正大学から指名した。また、内野を守る前ヤンキースのルイス・クルーズも補強。手ごたえを持ってシーズンに向かう。

「今年こそ優勝する」。シーズン1位でのリーグ優勝（05年はシーズン2位、プレーオフでホークスに勝利してのリーグ優勝）となれば1974年以来、実に40年ぶりとなる。今年こその不退転の決意を持って2014シーズンに挑む千葉ロッテマリーンズ。読者の皆様もぜひ、QVCマリンフィールドに足を運んでいただき、チームを後押ししていただきたい。

（千葉ロッテマリーンズ広報　梶原紀章）http://www.marines.co.jp/

ぼくたちの昭和のものがたり ⑧

「半世紀前」

50年前。この頃を覚えているのは団塊の世代以前か還暦を過ぎた方だろう。

昭和でいえば39年。ちょうど50年前は所得倍増躍進時代で日本も国際化の波に乗ってアジア初のオリンピックが東京で開催された。開会式や女子バレー、体操、レスリングなどは僕たちはテレビの前にかじりついて熱心に見た。わが家のテレビは、か細い4本足の付いたチャンネルをガチャガチャ廻す旧式。開会式の日本選手団ブレザーが赤かったのは当時のわが家のモノクロテレビや新聞写真では知る由もなかったのである。

開催期間中チャンネル争いはなかった。もう50年以上テレビも見続けているのだと思うと感慨深いものがある。

半世紀前には、既に東京モノレール、首都高速道路が開通し東海道新幹線も開業した。関西在住の僕は新幹線を新大阪駅まで見に行ったことを思い出す。受験勉強中だったが、どうしても実物をみたかったのだ。

省線（現在のJR）の初乗り運賃20円は小遣いから出して、不足分は母が財布に補充してくれたと記憶している。白と青の流線型の姿をした夢の超特急「ひかり」と「こだま」はびっくり感動モノで、何枚もこれもモノクロ写真で撮り、友達分の焼き増しをして得意げに配った。

僕はその頃「愛と死を見つめて」に純粋に感動していた多感な高校2年生。憧れの女子が同じ高校にいた。受験勉強と思慕のはざまに揺れながら、僕は坂道半分が舗装されてないデコボコの悪路を、大きな荷台付きの親爺の自転車で高校に片道6キロの通学路を往復していたのだった。（山田一夫）http://dachsjp.com